自立的政治闘争団体と政党政治（Ⅳ）
——青年ドイツ騎士団の挫折とナチズム運動の台頭——

岩　崎　好　成

Independent Political Combat Leagues and Party Politics in the Weimar Republic (Ⅳ)

Takashige IWASAKI

(Recieved September 4, 1997)

5　騎士団の取組みに対する団内外の声

(1)　団指導部の自己正当化

政党・政治闘争団体両ファクターの統合運動体としての国家党形成の企図およびその挫折は、青年ドイツ騎士団の内外でどのように受けとめられたのであろうか。騎士団の取組みはいかに評価されていたのか。ここでは先ず騎士団内部の声からひろってみたい。

当然のことながら、騎士団指導部は、「国家党へと至る展開は一直線上にあ」り、この「任務は決して不自然なものではなかった」、と自己評価していた。そして党分裂については、

「我々は些かなりともこの線上から外れることはなく、困難は、国家党に参加した特定の集団によって引き起こされた妨害による。」「我々は国家党をめぐる全活動に際し、(政党)合併などということを聞こうとは思いもしなかった・・・民主党は、運動のために名誉ある取組みをしていたコッホ・ヴェーザーを排除するということすら成し遂げている。もはや『運動』はなく、あるのはただ『合併』のみ。」

として、その責めを民主党側に負わせていた。(1) 団長のマーラウン自身も、国家党フラクションからのＶＮＲ（真正国民全国連合）系議員の自立を指示した廻状において、次のように述べていた。(2)

「国家党とは本来何であったか。国家党はラディカリズムへの最初の反撃たるはずであった。我々は国家党を、社会民主主義と右翼ラディカリズムの間に位置する国民層の行動主義的再生運動の起点となすことを欲した。我々は国家党を、ラディカリズムから撤退した旧ナチ支持層のための収容陣地となすことを欲した。民主党指導層の大部分は、この大きな課題を認識していない。」

その後10月末のビーレフェルトでの騎士団大会においても、彼は次のように説いていた。(3)

「我々騎士団は、それがドイツ国家市民層のポジティヴな行動主義立ち上げの中心となる、との条件の下に国家党形成に取り組んだのであった。我々は真の国家市民運動を欲したの

であって、国家党が他と同じような政党となることを望んだのではない。これに誠実なるがゆえに、我々は、国家党ではもはや真の国家市民運動創出は無理と認識した時、この党を捨てざるをえなかったのである。」

要するに団指導部の見解は、騎士団の国家党づくりへの途は正当なものであったのだが、共闘相手の民主党が、この統合運動体形成の意味を不当にも矮小化して政党合併レベルでとらえ、反ラディカルの市民による建設的な行動主義的運動の生成という目標を反故にした、というものであった。

本稿の立場からすれば、これは、前章で述べたように、騎士団を国家党の政党軍とするか、国家党を騎士団の付属政党とするか、という結合のあり方の問題を他の言葉で表現したものに他ならないが、それはさておき、この団指導部の見解は、果してそのまま一般団員のそれでもあったのだろうか。この点はかなり疑問と言わざるをえない。

(2) 団員の動揺

前章冒頭で紹介したＶＮＲ・騎士団廻状における、「国家党設立は確かに諸君の一部にとっては突然のことであった。」との言葉にすでに示されていたように、そもそも国家党結成の告知は、一般団員の多くにとって、唐突に上から下りてきたものであった。

日刊の団機関紙上でも、７月28日の国家党結成アピールが翌29日の紙面に掲載されてはいるが、それ以前には殆ど議論らしきものは存在していない。せいぜいその二、三日前に、抽象的に中道の結集や中道の国家政党が論ぜられているだけである。更には、選挙戦も後半に入っていた８月末から９月初旬にかけてなお、機関紙上では「ドイツ国家党への疑問」と称するＱ＆Ａコーナーが設置され、団員の理解が求められているのである。コーナー設置に際しては、「敵の陣営から、今日の歩みによってマーラウンはこれまでの政策を変更した、騎士団・真正国民（ＶＮ）運動の国家党支援は従来の政治との首尾一貫性に欠く、と繰り返し主張されている」、として国家党結成の正当性を再確認する体裁をとっているが、次のような問答においては、明らかに、国家党をめぐる団員の動揺更には反発への対処の意が濃厚である。(4)

――〔問１〕反政党主義は間違いだったのか。騎士団はいかに新党設立を説明するのか。

〔回答〕マーラウンは既にその著書『青年ドイツ宣言』で、ＶＮ運動の権力獲得への途はいづれ議会を経て行かねばならぬ、と述べていた。再生運動の議会への侵入としての国家党は、政党主義の欠陥を除いた根本的に新しいものである。マーラウンの議席放棄こそその証左である。

――〔問２〕「下からの結集」を騎士団は常に主張していたのに、これは完全に「上から」ではないか。

〔回答〕国家党の設立は騎士団にとって不意のことではない。既に真正国民行動VN-Aktionの第一回大会であるドルトムント集会に、後に新党に結集する大部分の指導者層が参加していた。マーラウンが独裁的に相談もせず決めたのでもない。騎士団・ＶＮＲの全国指導部、つまり「下からの」代表者達が賛成している。

――〔問３〕騎士団は従来自由主義について、時代遅れのもの、人民国家Volksstaatの理念とは結びつかないものとして反対してきた。国家党はリベラルの結集ではないか。

〔回答〕結成アピール等を読めばわかるように、国家党は決して伝統的意味でのリベラルとは性格づけられない。マーラウンが言うように、人民党党首のショルツE.Scholzが合流していたらリベラル・ブルジョワの結集政党になっていたかもしれないが、今日の国家党は全く新しいものなのである。

――〔問4〕騎士団はなお超党派的か。それとも国家党に密接に結合して政党護衛部隊Parteischutztruppeとなるのか。

――〔回答〕真の人民国家という目標を追求するブントのままである。国家党がこの目標達成を近づける限り、騎士団は国家党を支援する。マーラウンの言葉を借りれば、騎士団は国民の国家形成のための衛兵である。また、騎士団はメンバーに国家党入党を強いたりはしない。

問1は、後述するように、まさに「敵の陣営から首尾一貫性を欠く」として攻撃された箇所である。問2について補足しておけば、9月選挙後テューリンゲンとシュレージェンの地方組織が団指導部に反旗を翻す。これは選挙結果への失望にも起因するが、その指導部攻撃には、国家党設立時のこの「上からの」姿勢への批判が含まれていた。批判への対処の過程で、マーラウンも国家党の経過・結果をめぐる団員の不満の存在をそれとして認めていたが、両地方では退団者が続出し、シュレージェンでは、30年11月に2214人いた団員が翌年2月には995人に激減した。(5) ちなみに選挙一ヵ月後に開かれたＶＮＲ幹部会議においても、6月のザクセン邦議会選挙参加以来、決定や行動がある種の強制下にある、との意見が表明されていた。(6) またハムブルクのＶＮＲ組織は、同選挙区の候補者リストに、中央行動委員会すなわち「上から」推薦されてきた人物を掲げることを拒否し続けたのであった。(7)

問3について付言するならば、そこでの回答は説得力を有していたとは言い難いだろう。仮にショルツが合流していたとすれば、おそらく彼は旧い自由主義を捨てさった人物として称賛され、彼を含めた国家党もまた「全く新しいもの」と主張されたに違いないからである。更には、団員の少なからぬ部分にとっては、党派的には民主党よりも団に近い立場の人民党を欠いた合併には、おそらく相当の違和感が存在したと思われ、この欠陥をあたかもショルツ個人の責に帰せしめるかの如き回答には大いに不満を覚えたのではなかろうか。また上述のテューリンゲンの反乱派は、思想的には更に右に位置し、機関紙上の国家人民党とナチ党に対する攻撃の激しさを嫌い、対右翼攻撃を緩和して右向き政治を展開するよう求めていた。(8) 彼らにとっては、問における「リベラル」とは人民党ではなくむしろ民主党を指していたのである。

他方、その民主党の指導部は、選挙後の騎士団・ＶＮＲとの対立の中で、「ブルジョワ左派政党」ないし「中道左派政党」としての国家党の方向性を固守し、「フロントの右への拡張が不可欠」と考えていたマーラウン等との差異を鮮明にしたのであった。(9) この、共に中道結集運動を目指すにしても左右どちらに結集の中心軸を置くか、という問題もまた、問4に見られる騎士団の政党軍化如何の問題とともに、国家党分裂の基底要因をなすと言ってよいだろう。問4の回答に見られる「騎士団はメンバーに国家党入党を強いたりはしない」という民主党側を唖然とさせたと思われる言葉は、以上で述べてきたことを踏まえれば、ある意味で必然であったと言えるかもしれない。長年にわたる騎士団の反政党主義的立場は、一方で既成政党の政治への全面否定を生み、他方で、それゆえにかえって団員の多様な政党所属を不問にしてきたの

であった。したがって、中道左派政党であり、恒常的にワイマルの政党政治体制ないし連立内閣を支えてきた既成政党でもある民主党のみを事実上の合併相手とする国家党を前にして、更には、騎士団の付属政党にはなりそうもない国家党を前にして、その設立の承認のみならずそこへの入党化までも上から団員に強制することは、最高指導者たるマーラウンにしても不可能だったのである。

とすれば、本稿の立場からすれば時代的要請と言える政党・政治闘争団体両ファクターを併せ持つ統合運動体形成を確かに国家党は現出せしめたのではあるが、しかし、その有利さを十分発揮するだけの内的結束という統合の内実を十分にもたぬまま、騎士団ひいては国家党は30年9月選挙に突入したことになる。他方、外からは、国家党と競合する他陣営が、同党の統合運動性が選挙でのセールス・ポイントにならぬよう、騎士団・民主党の過去のあり方との整合性を問いつつ、国家党の新奇性・独自性を否定する非難の声を浴びせることになるのである。

(3) 外からの批判

中央党のパンフレットはその一つの好例と言ってよいだろう。9月選挙時、中央党は青年向けパンフレットを配付し、その中で、ナチ党・社会民主党・共産党そして青年ドイツ騎士団を攻撃した。これは青年層の獲得に際し、三政党とともに国家党が競合対象になる、との中央党の判断を指し示すものと解しうるだろうが、そこでは、次のようにマーラウンを批判していた。[10]

「『政党主義反対、金権主義反対』とはマーラウンおよび青年ドイツ騎士団のスローガンである。そのマーラウンが、消えゆきつつある民主党員とともに、『ドイツ国家党』などという思い上がった名称の自由主義政党を結成した。そして自らの闘争相手であるはずの金権主義に牛耳られた選挙候補者名簿に、友人たちをリストアップした。彼はまたしても、その部下とともに金権主義に敗北したというわけだ。マーラウン氏ほど迅速に自らの原則を棚上げする指導者も稀であろう。」

また、思想的に共通する部分を持ちつつも騎士団の政治運動に合流せず、ザクセン邦選挙でもＶＮＲと競合したキリスト教社会国民奉仕党の選挙パンフレットも、名指しこそしないが、「新規の名称や新規の集団形成によって自らを救わんとする瓦解途上の旧諸政党」という表現で、国家党を攻撃していた。[11] 更に、この選挙時、「(反ヤング案) 国民請願運動をともに戦い、プロイセンのマルクス主義支配に反対する闘争をおこなう政党に投票せよ」として、[12] 人民党支援を中止しつつも、必ずしも国家人民党単独支持も打ち出さず、ナチ党への投票も促進していた鉄兜団は、その機関紙上で、次のように批判的に国家党生成の経緯を解説してみせた。[13]

「中道では、新集団化があまりに遅すぎたとの不安に今や捕らわれている。それゆえ、二、三の指導者は自己の組織に諮ることなく、大慌てで新党を設立した。これをドイツ国家党という。無論、人民党は憤慨して、国家党においてはリベラル中道の大統一が重要になっているのではなく、民主党を改名しただけで、人民党党首ショルツが取り組んできた結集運動を妨害するものだ、と表明した。民主党は避けられそうもない選挙敗北への不安から、ベルリンのキャバレーが客の入りがよくない時にやる手を使ったようだ。つまり、店を二週間閉めて壁の色を塗り替え、よくないボーイの二、三を放り出し、力のある呼び込み屋

と契約し、そしてとりわけ店の名前を変える。これと似たようなことを、民主党は、これまたザクセン邦選挙で自らのＶＮＲには見込みがないことを確信したマーラウン氏とともにやった、ということなのだ。」

また、「選挙カーニヴァル」と題するカリカチュアは、民主党員と思われる人物に剣とマントを与えて騎士の格好をさせているマーラウンを描いて、「貸衣装屋マーラウン」というコメントを付していた。[14] あるいは、次のような、先に紹介した騎士団指導部の「国家党へと至る展開は一直線上」との弁明を愚弄するかの如き文章や国家党の分裂を予想する文章も、同紙面に見い出すことができる。[15]

「民主党の終焉と、マーラウン指揮下の国家党へのその模様替えは、一つの政治的悲喜劇である。騎士団の、右に位置してフェルキッシュで黒白赤のために勇敢に戦わんとする、政党主義と金権主義に抵抗せんとする理想主義的立場のブントから、ベルリンのアスファルト・デモクラシーの同盟相手となるまでの歩みは、首尾一貫した形で近時完遂された。国家党への変貌による衰退民主党の再興は、政党的にはそして関係者には有利かも知れぬが、騎士団のこれまでの世界観が新しい政治的友人達とずっと一致していくのかどうか、疑わしいように思える。」

そして、この予想が的中した際の鉄兜団機関紙の論評は次のようなものとなった。[16]

「二つの自壊しつつある組織の相互支援を可能にするというだけの任務を有していた国家党は、今や完全に崩壊することになった。」「この比較的大きな最初の政治的実験は、ともあれ次のことを示したと言えよう。すなわち、罰せられることなく、不適当な勢力の、間違った方法および理解しがたい目標設定による政治的結集など行いえない、ということを。この誤った企てのグロテスクさをいま一度特徴づけるためには、選挙中にあらわれた滑稽な言い回しを思い出せばよいだろう。国家党に入党したのかどうかを友人に聞かれて誰かが答える。『どうしてまた？僕はユダヤ人でもないし反セム主義者でもないよ』。」

最後の文章は、ユダヤ人メンバー・支持層の多かった民主党と基本的に反ユダヤ主義的立場をとっていた騎士団との合併を痛烈に皮肉ったものだが、その反ユダヤ主義の雄であったナチスの側からの国家党分裂時の対マーラウン評は、次のようなものであった。中央党の選挙パンフレット同様、ここでも民主党系企業家の存在と騎士団のこれまでの反金権主義的立場との関係如何が、非難の対象となっている。[17]

「マーラウンは国家党破産を通して、自らの政治的破産宣告の鎖にまた一つ新しい輪をつけ加えた。だが、彼が、マイヤー＝シュトルパー＝メルヒオール商会のユダヤ的金権主義的事業から自分の掛け金をひきあげることで、自身の関与を帳消しにしうると考えているのなら、それはひどい思い違いであろう。」

以上、外部からの批判の声を若干紹介してみた。確かに、中道的立場のマスコミの中には、国家党の選挙結果に対し、「隣接諸政党よりも票の減が小さかったのは、疑いなく騎士団支持者の働きに帰する」、「民主党のみでやっていたら、議席は一ダースもない」との声もあった。[18] がしかし、現実の騎士団は、上述の如く、一方で、外部からの的を射たともいえる攻撃に曝されつつ、他方で、それに共振し大いに動揺しうる団員を抱えて、選挙を戦っていたことになるのである。

国家党分裂に際しては、中動的立場のマスコミの一部は、「中道陣営の政治勢力の重要性・使命を信ずる者は皆、これを冷笑しようとは思わない」としつつ、「コッホ・ヴェーザーとマーラウンがなした（正当な）企図に対し、時代と人間が熟していない」、「(真に）政治的な国民になるためには、我々にはきわめて多くのものが欠けている」と嘆いていた。[19] これは要するに、反ラディカリズムのために小異を捨てて大同に就くということが、国民レベルでも政治家レベルでもなしえていないことへの批判と解せようが、こと国家党においては、そこに併存する本来水と油の関係の政党ファクターと政治闘争団体ファクターを小異となさねばならないという問題を抱えていたのであった。そして、マスコミの見解も、国家党の崩壊は、異なった本質的にそぐわない要素の連合ということに帰す、というのが圧倒的だったのである。[20] そこで注目されるのが、鉄兜団機関紙の選挙後の次のような論評である。[21]

「ナチスは、同時に国防団体と政党であることの難しさについて曖昧にはできないだろう。騎士十字の旗を、よりにもよって民主党のダビデの星に供した・・・マーラウン氏の騎士団は、政党として活動する国防団体は政党として終わる、ということを実証してみせた。したがって、鉄兜団が、政党の争いや議会の営為から団として遠ざかったのは正当であった。」

上掲「国防団体」は政治闘争団体と同意であるが、鉄兜団は、政治闘争団体と政党との結合の無理を主張し、その失敗の実例を騎士団に、失敗の可能性をナチスに見ていたのであった。しかし、既成の政党・政治闘争団体の組合せであった国家党の企図とは異なり、言わば内から両ファクターの統合運動体形成を果たし、30年選挙で現実の勝利をおさめていたナチズム運動にまでそのような見方が該当するのかどうか、無論疑問である。ここではむしろ、上掲引用文は、鉄兜団の、議会制民主主義下における権力獲得策に果敢に挑むことのできた騎士団へのある種の羨望の念、そして、現実にナチ党・ＳＡ両組織の統合を維持し、運動としても成功しているナチズム運動への羨望と驚異の念の裏返しと解釈すべきかも知れない。鉄兜団は選挙前には、50議席近く獲得するのでは、と国家党の健闘の可能性に脅え、選挙後には、同団が予想していた80議席をはるかに越えるナチスの勝利に驚愕していたのであった。[22]

(4) 鉄兜団のジレンマ

ともあれ鉄兜団は、一貫して自立的な政治闘争団体の途を歩き続けたのであった。右翼諸政党に対しかなり柔軟に提携を図っていった同団ではあったが、国家人民党と合併することもなく、また自らの付属政党を作ることもなく、その意味では、騎士団以上に反政党主義的反議会主義的原理に忠実だったと言えるだろう。ただ、それだけに、団自身の権力行使を如何になすか、という課題を常に抱えることにもなったのであった。

少し振り返ってみれば、騎士団のその後の行動の起点ともなった29年９月から12月にかけての反ヤング案国民請願・投票運動は、本来鉄兜団が意図していた内容とは全く異なったものであった。すでに第２章で指摘しておいたように、28年11月の鉄兜団設立十年祭で公にされた内容は、賠償問題とは無関係の、「議会主義システムの根本欠陥への攻撃」を主眼とする憲法改正要求であった。すなわち、54条の破棄による議院内閣制の放棄を通して「議会の単独支配を一掃し、替りに（大統領の）強力な統治権力を樹立する」こと、および、37条の修整、つまり

反逆罪・偽証・風俗罪ないし公民権剥奪にあたるような行為が問題となってる場合の議員の不逮捕特権の不適用を通して、「最低限の政治的市民的モラルをもった人物のみを国民代表として認める」ことを具体的内容としていたのであった。[23] そして、この「必要な憲法修正は議員自らの手ではなしえない」がゆえに、自立的政治闘争団体たる鉄兜団が、国民請願という手段で行うというわけであった。

だが現実には、国民請願を成立させるだけでも有権者の十分の一、すなわち団員40万のほぼ十倍にあたる署名数が必要であり、国民投票成立ともなれば有権者の過半数の参加を必要としたのであった。したがって、32年に第二団長デュースターベルクの立候補をみた大統領選参加を含め、院外手段を講じての政治変革は、事実上、政党政治勢力を含めた国民多数の支援を仰がざるをえず、その意味では、政党機能を受容して自ら議会に参加すること以上の困難さを内包していたのである。この意味での一つの帰結が、国家人民党党首フーゲンベルクの介入による上述の国民投票運動の改変であった。鉄兜団は自立的政治闘争団体であり続けることによって、騎士団のように壊滅的打撃を被ることもなく組織を温存できたが、実際的政治権力行使のレベルでは副次的役割に甘んじなければならないことが多く、結局、ワイマル政治の批判的存在の域から脱出できないであろう。

このように二つの自立的政治闘争団体それぞれの企図をふまえてワイマル政治を眺めた時、あらためて、政党軍ＳＡを備えたナチズム運動の個性に注目せざるをえない。その本格的検討は別稿に譲らざるをえないが、[24] とりあえず、本稿最終章にあたる次章では、騎士団がナチズム運動をどのように捉えていたのかは明らかにしておきたい。

6　騎士団のナチズム運動観

(1)　対ナチ批判①——思想・政策面

ＶＮＲを擁して戦ったザクセン邦議会選挙、国家党を擁して戦った30年国会選挙、そのいづれにおいても騎士団の主敵はナチズム運動であり、そしていづれの選挙においても騎士団は敗北したのであった。では騎士団とりわけその指導部においては、ナチズム運動のどこが問題であり、何を批判すればその伸張を抑えうると判断されていたのであろうか。また、にもかかわらず敗北を喫した時、騎士団はどのように自己批判し、どのように彼我の優劣を論じたのであろうか。以下ではまず、騎士団のナチズム運動批判から見てみたい。

単純に区分けすることは実際には不可能であるが、ここでは批判の中身を、思想・政策面と行動・闘争方法面とに分け、前者から扱うことにする。

と言っても、騎士団の基本認識は、「何らかの思想論争をなす能力に欠けているナチス」、「統一的でポジティヴなイデーがナチスにはないから反対精神Antigeist中心」というものであったから、[25] それほど深く論じられているわけではない。更に留意すべきは、以下に示されるように、フーゲンベルク攻撃に見られた執拗なまでの反金権主義は、ナチズム運動に対しては見られないことである。

ナチズム運動の政策で批判されているのは、ひとつには、それが「ジグザグコース」である

ということである。例えば、ザクセン邦政権がマルクス主義者のそれであろうが、「見せかけのナショナリズムとかブルジョワ・ナショナリズム」と攻撃してきたはずの人民党中心政権であろうが、ナチスは共に支持することができ、「反動」のフーゲンベルク・グループとも国民請願で提携することができる、ベルリンのナチスと話すと、都合の悪い部分は、「あれは南ドイツのナチスの方向、北ドイツは違うと言い、その北ドイツでも、更にシュトラッサーとゲッベルスの方向がある」、と述べて、だからこそナチスには「何かに反対というネガティヴなイデーしかない」と騎士団は断じていた。[26]

更に批判されたのは、ナチズム運動の破局政策路線である。国会選挙投票日直前の団機関紙に掲載された論説は、シュトラッサー等ナチ指導者の次のような発言をまず紹介する。

「我々は意識して破局政策を行っている。残念ながらまだ、我々が気に入るほどにはテロル化しえていない。我々の目標は、今日あるすべてを打ち壊すことだ。ドイツを解放するのは思慮ではなく拳だ。」「我々は破局政策を遂行する。なぜなら、リベラルなシステムの破壊たるカタストローフェのみが、我々が国民社会主義と呼ぶ新しい構築物への途を開くのであるから。」

その上で、同紙は次のように論ずる。[27]

「革命期と異なり今日では、自らをナショナルと呼ぶ運動が、国民的社会的経済的不和の中にある国民を文盲の国家形態すなわち独裁の下に屈服させんがため、不寛容・テロル・暴力の精神を展開しようとしている。ナチズムは、6500万の人々を己れの狂気政治の実験に曝しうる時が到来したとみなしている。」「何百万のドイツ人男女がドイツの窮状を救う建設的手立てを求めているのに対し、ナチズムは公然と破局政策への信奉表明をおこなっている。共産主義がドイツをまず破壊してその上で社会主義的建設を開始せんと望むのと同様に、ナチズムはカオスを持ち込み、万人の万人に対する闘争を引き起こした上で、国民の気運を独裁にむけて熟せしめんとしているのだ。」

この、破局政策の追求という面でのナチズムと共産主義との同一視は、騎士団の反ラディカルの立場からすれば当然ではあるが、しばしば強調されたところである。例えば30年11月マーラウンは次のように述べている。[28]

「暴力を有する者は正当なり、これがボリシェヴィズムの世界観の土台である。今やナチズムにおいて、これと同じ土台に立つ運動が生じたのである。・・・ナチスの手法すなわちテロルに対するテロルは、ボリシェヴィズム＝マルクス主義の手法以外の何物でもない。これは我々の思想の対極にある。必要とされる意志力は、国民の煽動から生ずるのではなく、ポジティヴな肯定的人間性にもとづくものである。」

ところで、29年11月の団機関紙上の論説に「ヒトラーの政治原則」と題するものがある。[29]これは次のような興味深い言い回しも含んでいて、二つの運動のあり様を比較する上で有益である。

「ナチスは騎士団にとって本質的に異質である。」「今日の大衆民主主義の下では、大衆宣伝と『大口たたき』の競争が支配している。・・・大騒ぎする者、その受益者ということではナチスが目立つ。」「ヒトラーというのは、決して今日の体制のプログラム上の敵対者ではなく、政党主義と大衆民主主義に運命を委ねた時代現象であるにすぎない。」

「本質的に異質」「時代現象」という言葉に、批判するに足らない、或いは批判がそれとして噛み合わない存在としてのナチズム運動の急速な台頭に騎士団が唖然としている様が読み取れるように思われる。実際、団機関紙においては、28年の前半までナチズム運動に関する記事は殆どなく、団の批判対象としてフーゲンベルク・鉄兜団と同等ないしそれ以上の扱いを受けるようになるのは、29年後半以降のことである。さて、上掲論説は次のように続ける。

「ヒトラーの体制攻撃は国家構造のレベル上でなされているものではなく、他の者が今この体制を支配していることへの反発という程度のものである。ナチスには新しい国家構想など存在しない。・・・国家政治的認識をまったく欠いているからこそ、ヒトラー党は主として経済事象に目を向ける。そして社会主義的経済プログラムをもち出し、その遂行のために独裁の途を追求するのだ。」

この主張をより具体化したものが、この時期発行されたと思われるナチ党綱領を扱った小冊子『ヒトラー党とその綱領』である。では、25カ条綱領は、騎士団からどのように批判されたのであろうか。そこではまず、次のように述べられている。(30)

「批判的観察によれば、この綱領は内容的には、自明のことか、問題ある条項か、全くデマゴギッシュな要求か、のいづれかであることを示す。」「条項25のうち、11カ条が経済上の要求であるのに対し、わずか7カ条が政治上、4カ条が国法上、3カ条が文化上のものである。これが意味するのは、経済的本能・利害への思弁がナチズム運動の主要部分をなすということである。」

25カ条綱領のうち騎士団が経済要求条項として取り上げ批判しているものについて若干解説するならば、まず、「自明」とされているのは、領土・植民地を要求している3条、労働の義務、全体への奉仕を謳っている10条、養老制度の拡充を要求している15条である。非国家市民の国外追放の可能性を述べた7条は「すぐさま外国での対抗措置を招く」と批判されている。利子奴隷制の打破、戦時利得の没収、公共の利益を害する者への死刑宣告を主張する11、12、18条については、ナチスの同盟者フーゲンベルクは抵触しないのかと問われ、「理論と実践の違い」が明白な宣伝的価値しかない条項とされた。企業の国有化(13条)、土地改革(17条)は半マルクス主義的要求と一蹴され、大企業の利益配当への参加要求(14条)も、被傭者の最低生活条件の維持を図ればよいとして拒絶された。最後に16条の中間層保護要求に対しては、自助と経済議会の樹立ならびにそこでの問題解決が主張されていた。(31) 騎士団に言わせれば、これらナチスの主張は総じて「個別経済立法の提案であって、広範な経済改革のための原理的可能性を示すものではな」く、「今日の官僚主義的行政に何らの変化ももたらさない」のみならず、「独裁的措置を考慮に入れなければその実現の基盤を欠く」性質のものなのであった。(32)

そして最終的には、次のように結論されて、騎士団のナチ党綱領批判とりわけ質量ともに問題ありとされた経済条項批判は、先の「ジグザグコース」批判と結合することになる。(33)

「ナチ党綱領の経済条項がまったく勝手気ままに並べ立てられていることは明白である。ナチスのある者はそれらに宣伝的価値のみを認め、ある者はユダヤ人のみに適用しようとし、またある者は社会主義的要求部分を上位に置かんとする。したがって今日、ヒトラー党の下に二つの異なった方向が生じているのは驚くに値しない。すなわち国民主義的反動(ヒトラー)と社会主義的革命派(シュトラッサー)。ヒトラー路線は反動右翼と、シュト

ラッサー路線はボリシェヴィズムと手を結ぶのである。」

(2) 対ナチ批判②——行動・闘争方法面

ところで、この小冊子には、末尾に「ヒトラー党の手法」と称する一章が付せられており、そこから、ナチズム運動の行動・闘争方法に対する騎士団の批判の主要部分を知ることができる。ここでは二つの文章を引用しておこう。[34]

「(ナチズム運動において) 最も目立つ点は、他のあらゆる政治的尽力に対してともかく犯罪的ないし売国的と評する自制なき憎悪宣伝の手法である。」「しばしば流血の衝突をもたらしているその仮借なきテロル行使によって、ナチスはドイツの不穏を拡大し、意識的にせよ無意識にせよ、内戦の雰囲気づくりを助長する。」

後者のテロル行使については周知のところでもあり、特に付言する必要はないと思われるが、テロルの主体となったＳＡについては、団機関紙で、「とりわけ顕著なのはＳＡの規律のなさ」、そこにあるのは「熱狂ではなく狂信」と述べられている。[35]

前者に関しては、機関紙上でも同様の主張を見い出すことができる。例えば、29年８月のある論説は次のように言う。[36]

「ナチスのプロパガンダは、もとより大衆への影響力浸透をめざし、魅力的なスローガンの提示を追求し、激しいアジテーションで支持者を熱狂させる。ナチ党に属さない者は皆、ユダヤ人・フリーメーソン・イエズス会員のいづれか或いはその仲間とされる。その主張の真偽を確かめようとする者は、マルクス主義者か俗物との烙印を押される。・・・しかし、偽りの宣伝というものは結局、それを発した者の上に戻ってくるに違いない。」

30年７月に掲載された論説も同様である。[37]

「この運動はその全戦術を次のようなスローガンの下に導いてきた。すなわち、我々のみが勇者であり他は臆病者。我々のみが闘士であり他は責任回避者。」「ヒトラー的成功の秘訣は、論理抜きにあらゆる美点を自らおよびその支持者の側に当然のものとして主張し、ブルータルなやり方で、すべての政治的敵対者・競合者にあらゆる欠点・欠陥を押しつけてきたところにある。ヒトラーは支持者に、まったくの自制の欠如を植えつけてきた。」

そして、この「自制の欠如」に、次のような言い回しを加えれば、ナチズム運動の闘争方法に対する騎士団の批判のおおよそは掴めるものと思われる。すなわち、「デマゴギーと全くネガティヴな宣伝がナチ党の第一の闘争方法」、「デマゴギーとファナティズムによる煽動を通して結びついているような政治運動」、「ナチ党の全政治は、良心の欠如と虚偽に際立つ」。[38]

さて、騎士団のナチズム運動に対する批判は以上のようなものであったとして、若干気になるのは、この対ナチ批判のあり方あるいは対ナチ批判の騎士団自身への影響・拘束如何の問題である。

騎士団は、ナチ党綱領の経済偏重を批判し、テロル行使を全面否定し、闘争・宣伝方法をデマゴギー・狂信過多と攻撃し、そして自らをその対極に置いたのであった。しかし、イデオロギー批判はともかく、行動・闘争方法面でのナチズム運動への徹底批判は、騎士団自身の、民主党からも期待されていた政治闘争団体ならではの「激しい活力」や「プリミティヴさ」を無意識に制限・弱体化させることはなかったか。ナチズム運動に対する自らの対極存在視は、果

して、内実を伴った、すなわち行動・闘争面で同等に対抗しうる力量を有した上での差異表明であったのか。少なくとも30年選挙までの騎士団には、ナチズム運動がもつ力量を事実上認めながらも、対抗するために、そこから教訓を引き出すという姿勢が見られないのである。

例えば、先に示したように、騎士団はヒトラーを「時代現象」として位置づけつつも、そこから同時代に生きる自らにプラスになるものを引き出そうとはせず、「本質的に異質」と片づけたのであった。上掲30年7月の論説でも、「ヒトラー的成功の秘訣」という言葉でナチスの宣伝方法が着実に支持者を獲得している点を認めつつも、しかし、それは直ちに全面否定の対象とされるだけで、同等の、言わばマーラウン的成功の秘訣の有無は不問にされている。同論説には、「その注目に値するデマゴギーによって、ヒトラーは広範なドイツ国民層の失望と混乱を利用する術を心得ていた。」という言葉もあったが、そこでも、騎士団あるいはマーラウンがそれに対抗する「術を心得てい」るのか否か問われることなく、結論としてただ、「デマゴギーは、ナチ党ほどの規模で展開した場合破産せざるをえない」と述べられるだけである。(39) 前章で示したように、国家党分裂に際し、団指導部は、民主党側がポジティヴな行動主義的運動の生成を妨害したと主張したが、果して、騎士団それ自体は、ナチズム運動に対抗しうるだけの行動主義を有していたのであろうか。

マーラウンの著『ドイツ国家党』の中に「行動主義」と題する一章がある。そこではナチズム運動を「ネガティヴな行動主義」の担い手、自らを「ポジティヴな行動主義」のそれと対比的に描き、その中身を提示していて興味深い。最後にこの文章を取りあげ、ナチ批判の中身および上述の問題点について再確認しておこう。マーラウンはまず、「行動主義は時代の要請である」として、次のように続ける。(40)

> 「中道ブルジョワ諸政党は、左右両翼の行動主義を前にしてたじろいでいる。しかし、ドイツ国民には、諸権威に行動主義的なものを接合せんとの一種宿命的な願望がある。権威なき行動主義はありえず、行動主義なき権威もまたありえない。これこそ、これまで以上に、政党すべてが相対せざるをえない基本語彙なのである。」

ところが、現在のドイツ社会は「ネガティヴな性質の行動主義が意味過剰の状態になっている」とマーラウンは言う。では、「ネガティヴな行動主義」とは何か。

> 「この種の行動主義の骨格をなしているのは比類なき中傷である。ヒトラーはこのネガティヴな行動主義の担い手となった。その宣伝活動と政治的意味合いは、新しい用語を冠するにふさわしい。すなわち、それをヒトラー主義Hitlerismusと呼んでよいだろうし、この人物の行動はそれ程に象徴的なのである。・・・ヒトラーは、人々を全く非ドイツ的な狂信へと育成することを心得てきた。現状への憤激のかき立てこそ彼の得意とするところである。この種の宣伝の効力は、対立にアクセントが置かれなくなったら失せてしまおう。(ゆえに)多種多様な反対精神がその盟友となる。失望し立腹した人々がこのフロントに馳せ参ずる。そこでは、意見を異にする者への比類なき中傷が目立つのである。」

これに対し、当然「ポジティヴな行動主義が喚起されなければならない」。では、どのように。

> 「このポジティヴな行動主義は事物に即した政治の上にのみ構築されうる。それはあらゆる中傷、狂信を拒絶する。このポジティヴな行動主義は、中道勢力の意志力の活性化を意味する。これにより、無力な中道勢力の中にラディカルな意志力が集中的に切り込むこと

はない。・・・ナチズムは否定的意志力を政治に奉仕させることを心得てきたが、それと同様に、このポジティヴな行動主義は新しい国家市民運動に奉仕することになろう。」

政治運動およびその指導者にとって、要は、この場合、行動主義を巧みに分類して論ずることではなく、[41] 行動することそれ自体のはずであろう。「ヒトラー主義」と冠してもよいと認められる程にナチズム運動は現実に行動主義的であったのに対し、果して騎士団は、ポジティヴと称する行動主義を、ナチズム運動と対抗しうる程に現実化していたのかどうか。30年9月選挙を国家党は、中道かラディカルかのレベルのみで戦ったわけではない。ナチズム運動と同種の統合運動体として、しかも、ナチズム運動を主敵に定めて戦った以上、国家党の行動主義的力量がそこでは大いに問われていたものと思われる。選挙後、騎士団は、ポジティヴな行動主義にもとづく国家市民運動の生成への民主党の無理解を非難していたが、しかし、実質的に国家党の行動主義を担っていたのは騎士団であり、選挙時問われたのは騎士団の行動主義的力量であった。この点を含め、騎士団は9月選挙の敗北をどう総括していたのであろうか。

(3) 30年選挙後の自己批判

敗北に終わった30年9月の国会選挙から約一ヵ月後、マーラウンは次のようにナチズム運動の勝因の一端を分析した。[42]

「いわゆる政党装置は、強力な出版物の支援があったとしても、今日もはや人々に政治的追従を強いることはできない。諸例が指し示すように、大量の物質的手段の投入も、活力ある運動との結合に成功しない限り無効である。ナチスは両者を自家薬籠中のものとした。ナチスはきわめて豊富な資金と、活力ある運動を可能にする行動主義的集団を、自らの自由となした。活力ある運動こそが、強力な物質的手段と結びついて、彼らの選挙勝利を保証したのである。その行動主義が各地の不満に突進した。それを通して彼らは、前述の強みに更にひとつの特別な理念的魅力までも獲得したのである。これは全くネガティヴな性格のものではあったが、しかし、政治闘争においてはきわめて有効であった。」

一方、国家党側の敗因については、ここでは直接語られてはいない。しかし、騎士団の今後の課題として、「政治的意思力の展開においてナチズムに引けをとらない行動主義的運動の確立」と「基本的経済プログラムと文化プログラムの創出によって国家政治プログラムを補完する」ことが挙げられていた。

また、騎士団幹部は、「この選挙戦で我々が引き出した教訓」として、①組織力の充実、②財政強化、③プログラムの拡充、の三点を挙げていた。①と③については、次のように述べられている。[43]

「騎士団・ＶＮ運動の組織を、あらゆる単位に至るまで強い信頼性を帯びたものにし拡充することが肝要である。完全に弱点なき組織化を我々は・・・用意しなければならない。」

「ＶＮＲ幹部会は、我々の国家政治上の基本立場にもとづきつつ、重要なすべての生活課題のためのプログラム的目標設定を作成する専門委員会を設置することを決定した。その際、特に文化政策と経済政策にむけての基本的立場を作りだすことが重要である。」

要するに、選挙後の騎士団は、ひとつには組織力ないし行動主義のレベルにおいて、いまひとつには経済・文化プログラムの実質的欠如において自らの弱点を感じ、そこでのナチズム運

動の優位を認めていたのである。11月初旬、レンズブルクで当地の団指導層を前にしてなされた演説において、マーラウンはこの点をより率直に語っている。[44]

「あらゆる民主党員が、我々が答えられないような経済政策上の質問を提起した。・・・騎士団の経済プログラムが書かれねばならない。・・・文化政策においては今日、教会と自由思想家のもののみが支配的である。その他の者のプログラムは世上知られることがない。また、我々は今やポジティヴな行動主義をいかにして招来せしめうるか。第一には、騎士団のプログラムによって、第二には、より強力な機動性を組織に与えるのに成功した時。」

先に示したように、選挙前には、騎士団は、ナチ党綱領とくにその経済条項を徹底的に批判していたのであるが、選挙後には、自らの国家政治レベルの変革構想中心で経済政策レベルでのさしたる代案もない批判が、国民に共有されなかったことを痛切に自己批判していたのである。マーラウンは10月末のビーレフェルトの騎士団大会においても、「選挙戦の別の教訓は、我々のプログラムを拡張する必要があるということだ。我々は、とりわけ現在の経済闘争にたいして態度を決定せねばならない。」としていた。[45] また、10月中旬に開かれたＶＮＲの幹部会議の席上でも、「日常問題への建設的姿勢こそ本質」とされ、「思想世界の日常の必要性上の具体化」が出席者から要求されていたのであった。[46]

さて、レンズブルクでの演説は、次のように続いて、ナチズム運動に対する騎士団の運動レベルでの劣位を承認する。

「我々は全く別のタイプの行動主義者に発展しなければならない。我々は自らの集会に際し、より高度の行動主義的ニュアンスを付与しなければならない。騎士団はあまりにザハリッヒで、集会で拍手すらしないのである。精神だけでは人の心をつかむことはできない。(確かに)我々は意志をもつ人間集団である。(しかし)ナチスはその意志を表明することができ、そのことによって、人々の同意を獲得しているのだ。」

前節で問うたように、やはり騎士団の「ポジティヴな行動主義」はポジティヴではあっても、ナチズム運動に匹敵する程には行動主義的ではなかったのである。30年６月のザクセン邦議会選挙時には、その地域的限定と騎士団／ＶＮＲという緊密な統合運動体で戦ったこともあって、敗れたとはいえ、一定地域での組織作りおよびその結果としての票獲得にナチ党を凌ぐものがあり、一部マスコミに、ＶＮＲはナチ党と並んで「きわめて強力に活動した」と報じられたのであった。[47] しかし、９月の国政選挙に関しては、選挙後マーラウン自身が、団地方組織の中には数年来その管轄下の村々で活動してこなかったものがあること、あるいは団の空白地域としての南ドイツの存在等を認めざるをえなかったのであった。30年10月14日の団機関紙は、「問題は理念をどう現実化するかである。」として、騎士団の活動が事実上「自己満足」「美しき共同体」にとどまっていることを指摘し、「我々は、好感のもてるいい奴と少数の者に思われるだけでは駄目である。」と述べていたのである。[48]

おわりに

29年から30年にかけて展開された青年ドイツ騎士団の実践政治を跡づけた時明らかになったのは、自立的政治闘争団体は議会制民主主義の下でいかにして政治権力を獲得・行使するのか、

との課題の前に彼らが立たされていたということである。騎士団はこれを、自らの運動に政党機能を付与することで解決しようとした。それが真正国民全国連合ＶＮＲの設立であり、その拡大版としての国家党形成の企図であった。そして、それぞれ邦レベル、全国レベルの選挙戦への参加を経験し、同種の政党・政治闘争団体両ファクターを統合した運動体であるナチズム運動に挑戦したのであった。

しかし、この挑戦はほぼ完全に退けられ、のみならず共闘相手の民主党との対立から、騎士団・ＶＮＲは国家党から離脱することになった。ここから、論ずべき事柄のひとつとして、両ファクター統合の密度如何の問題が浮上する。子細に観察してみるならば、国家党においては、両ファクターを体現する民主党と騎士団との間に、騎士団と国家党の関係は政党軍か付属政党か、国家党の位置は中道左派か否か等異なった統合観・運動観が存在しており、統合の密度にはかなり疑わしいものがあった。国家党の風貌の組織的局面は、確かにそれが単なる政党政治運動ではないことを示したのであるが、しかし、統合運動体であることを強烈にアピールすることを可能にする内的融合性・緊密性を著しく欠いていたのであった。加えて、国家党の風貌の行動面を支えるはずの騎士団自体、上からの強制的合併への団員の不満を抱え、ナチズム運動に対峙しうる程の行動主義が備わってはいなかったことを後には自己批判したのであった。

では、国家党はなぜ、密度の高い統合運動体になりえなかったのであろうか。その根本原因は何か。

ひとつには、鉄兜団から皮肉られていたように、この統合運動が選挙対策上の産物としての性格を色濃くもっていたことであり、そこでは詰めるべき問題を詰めることなく、まず合併することが優先されたのであった。いまひとつは、国家党に、中道勢力の結集化という課題が課せられていたことである。ここでも、統合のあり方を検討する前に、勢力拡大が優先されることになった。要するに、この二点によって、例えば本来ありえたはずの、そして当初はマーラウン等も志向していたはずの、民主党との丸ごとの合併を避けその一部を騎士団／ＶＮＲに吸収するという、統合の密度を維持した運動展開への途は閉ざされたのであった。

そして、騎士団の急速な中道勢力への接近については、騎士団の基本思想のひとつである反金権主義の影響を指摘することができる。もうひとつの基本思想である反政党主義の立場からすれば、騎士団の政党機能を受容しての議会進出は、あくまで政党国家を打倒するための手段でしかなかったはずである。したがって本来の騎士団の立場は、その行動形態とも相まって、議会制民主主義下ではきわめてラディカルなものであり、決して中道陣営への帰属を自明とするものではなかった。国家党との関係でも、手段としての政党機能受容である以上、団の付属政党としてそれを位置づける途しかありえないはずであった。しかし他方、その反金権主義は、その格好の標的をフーゲンベルクに定めたため、フーゲンベルクの活動すべてに反対するという騎士団の姿勢を招来した。その結果、彼が立つ政治的位置によって騎士団のそれが規定されてしまうことになり、自ずと騎士団の位置を中道陣営に接近させることになったのであった。

ところで騎士団の基本思想は、上の二つに反マルクス主義を加えたものであったが、それらは、特にナチズム運動と比較した時、先に述べた国家党の組織上、行動上の風貌の弱点・劣位を補うものになっていたのであろうか。

答えは否である。そしてこう答える時、その基本思想からする騎士団の立場は意外とナチズ

ム運動に近いことに気づかざるをえない。まず反政党主義に関しては、騎士団もまたナチズム運動同様の政党・政治闘争団体両ファクター統合運動を形成した以上、他の単なる政党政治運動は批判できても、ナチズム運動を反政党主義から批判することはできず、しかも議会制民主主義打破のための政党機能受容という点で両者は一致していたのであった。反金権主義もナチズム運動を動揺させるものにはならなかった。そこにはフーゲンベルクのようにシンボルになる人物は存在しなかったし、ナチ党綱領も騎士団が「半マルクス主義」と評する程の金権主義とは程遠い内容をもったものであった。反マルクス主義については、騎士団は、破局政策・テロル行使・デマゴギーといった用語を駆使して、ラディカリズムの名の下にナチズムとマルクス主義を一括しようと努めたが、ナチズム運動が共産党や社会民主党と敵対していたのは明白であり、反共暴力実践ということでは他を圧倒していたのであった。ちなみに、民主党ですらが騎士団の行動力・戦闘力を欲し称賛し、左翼にも赤色前線兵士同盟や国旗団という政治闘争団体が存在している時に、テロル批判がどれだけのインパクトをもったかは疑問と言わざるをえないだろう。

騎士団が真正国民行動を開始した時、ナチ党の地方紙が「VN-Aktionとは国民社会主義のことであり、騎士団は国民社会主義の理論家、ヒトラー運動はその実践家」と述べていたことが伝えられている。[49] 含蓄のある言い回しではなかろうか。前段の、騎士団とナチズム運動の親近性の主張は、選挙後騎士団指導部に反旗を翻したテューリンゲン反乱派の、反ボリシェヴィキ的な国民社会主義National-Sozialは事実上我々のいうVolksnationalと同じではないか、と呼応する声を有していたのである。[50] そして後段の対比は、まさに「実践家」ではない騎士団の行動主義不足への自己批判に対応するものとなっている。20年代末期に政治闘争団体的ファクターを内包した統合的政治運動が求められたのは、単なる政党政治運動上あるいは議会政治上では見い出し難い要素がそこに存在したからであろう。それが例えば行動主義的政治であり、指導者政治であった。ナチ地方紙が言うように、騎士団を軸とする統合運動が、政党が担えば済むような「理論家」にとどまり「実践家」の域に達しえなかったとすれば、それは致命的だったとも言えるのである。

最後に、上で挙げた指導者政治に関わる問題を国家党に即して考察しておこう。国家党における対立の根底にあった政党軍か付属政党かの問題は、本来水と油の関係にある政党と政治闘争団体のいづれを上位に置くかという問題であるだけに、非常に難解であった。ナチズム運動そして騎士団／ＶＮＲにおいてこの問題がクリアできたのは、国家党のように既成の二つをそのまま合体させるのではなく、確立している一方が他を付属的に生成し言わば運動内部から拡充していったことによる。と同時に、そこには、水と油の両ファクターの上に立って、その分解・対立を抑え込む最高指導者の存在があった。マーラウンは騎士団／ＶＮＲにおいては両組織のトップの地位にあり、実質的に彼の決断に運動の展開は委ねられていたのである。だからこそ国家党への進展という「上からの」強制もあり得たのである。

これをヒトラーはすでに五年前に果たしていた点は特筆されてしかるべきだろう。彼は25年におけるナチズム運動再開にあたって、ミュンヘン一揆時に民間国防団体化していたＳＡを本来の政党軍の位置に戻し、そのＳＡに君臨していたルーデンドルフやレーム等を排して、運動における最高指導者としての地位を固めたのであった。[51] それと比較すれば、ＶＮＲ設立の試

みは余りに遅かったと言えよう。マーラウンがようやくＶＮＲを設立した時にはすでに、彼自身がナチズム運動を「ヒトラー党」とか「ヒトラー主義」と語ってしまう程の地位に、ヒトラーは到達していたのである。

さて、ＶＮＲに続く国家党において、民主党に足場をもたなかったマーラウンがヒトラー的地位に上昇しえなかったことは、すでに本論で明らかにした通りである。若干補足しておけば、コッホ・ヴェーザーは国家党分裂直後、「マーラウンは今なお、自らがヒトラーの好敵手たりうるとの思いで骨の髄まで凝り固まっている」が、しかし、党設立後今日までの騎士団・ＶＮＲメンバーの姿勢を見れば、「マーラウンがその支持層の心魂への己れの力を過大評価していた」のは明らかだと、彼のカリスマ性に疑問を呈していた。(52) マーラウン自身は、民主党側から分裂回避策として出された、「国家党幹部会議議長を二人とし、マーラウンがその一人に。」との提案を、自らを拘束するものと捉えて拒絶し、指導権確立のための契機とはしなかった。(53) 国家党に内包されていた様々の矛盾・弱点があらわになった時、これを、自らの指導的立場を強化することで徐々に解消し後日を期す、との熱意はマーラウンには薄かったようである。

30年11月、マーラウンはすでに次のように述べていた。(54)

「結集の企ては終わった。騎士団は結集の更なる方途を求めるべきではない。我々は貯水池にはならない。むしろ騎士団は、個々の人々を自らに引きつけるひとつの磁石となる。」

事実上の撤退・敗北宣言と言ってよいだろう。結局、騎士団の企図は、ナチズム運動の言わば引き立て役にとどまったのであった。31年以降の騎士団は、その活動の中心を、内地植民政策の推進要求と労働奉仕実践の方向に求めていく。彼らなりの新しい経済プログラム上の実践ではあったが、ここにはもはや政治権力獲得の意志は見られない。ＶＮＲは32年４月14日、その解散を決定することになる。

註

1) E.Eggeling, Partei oder Bewegung?, Berlin 1930, S.37ff.なお、コッホ・ヴェーザーは選挙後議員団長に選ばれず、更には民主党幹部会から追われ、国会議員職を剥奪されるに至っている。
2) 3.10.1930: Rundschreiben des Jungdeutschen Ordens. (Quellen zur Geschichte des Parlamentarisums u. der politischen Parteien.Dritten Reihe, Bd.4/I, Politik u.Wirtschaft in der Krise 1930-1932, Düsseldorf 1980, Dok.145, S.404)
3) Flugblatt: Abrechnung mit den Nationalsozialisten! (BA-Koblenz, Zsg.1, 128/9)
4) Der Jungdeutsche, Nr.201 v.29.8.1930, u. Nr.204 v.2.9.1930
5) A.Kessler, Der Jungdeutsche Orden in den Jahren der Entscheidung (Ⅱ) 1931-1933, München 1976, S.12f. 28
6) A.Kessler, Der Jungdeutsche Orden in den Jahren der Entscheidung (Ⅰ) 1928-1930, München 1975, S.154
7) Ebd., S.122

8) Kessler, (Ⅱ), S.12
9) Eggeling, S.23, 29f., 3.10.1930: Mahraun an Kürz.(Das Ende der Parteien 1933, hrsg. v. E.Matthias u. R.Morsey, Düsseldorf 1960, Dok.1, S.73), 11.10.1930: Oscar Meyer an Koch-Weser (註2資料内 Dok.Nr.148, S.412)
10) Zentrum: Katholisches Jungvolk in Stadt und Land! (Keine Stimme dem Radikalismus, hrsg.v.G.Buchstab, Berlin 1984, Dok.10)
11) CSVD: An die evangelischen Wähler und Wählerinnen! (Ebd., Dok.12)
12) Der Stahlhelm, Nr.31 v.3.8.1930
13) Ebd.
14) Ebd., Nr.35 v.31.8.1930
15) Ebd., Nr.34 v.24.8.1930
16) Ebd., Nr.41 v.12.10.1930
17) Völkischer Beobachter, v.10.10.1930. (Kessler, (Ⅰ), S.148)
18) Der jungdeutsche, Nr.217 v.17.9.1930
19) Kessler, (Ⅰ), S.147f.
20) Ebd., S.147
21) Der Stahlhelm, Nr.39 v.28.9.1930
22) Ebd., Nr.36 v.7.9.1930
23) Flugblatt: Warum Stahlhelm-Volksbegehren? (BA-Koblenz, Zsg.1, 88/8), Lagebericht Nr.127 v.31.10.1928 u. Nr.128 v.20.2.1929.(Reichskommissar für Überwachung der öffentlichen Ordnung u. Nachrichtensammelstelle im Reichsministerium des Innern: Lagebericht[1920-29] u. Meldungen[1929-33]. Bestand R134 des Bundesarchiv Koblenz veröffentlicht als Microfiche-Ausgabe, hrsg. v. E.Ritter, München-New York-London -Paris 1979)
24) さしあたり、『現代史研究』43(1997)に掲載予定の拙稿「政治闘争団体とナチズム運動の台頭」を参照されたい。
25) Der Jungdeutsche, Nr.234 v.6.10.1929. u. Nr.160 v.12.7.1929
26) Ebd.
27) Ebd., Nr.212 v.11.9.1930
28) Kessler, (Ⅱ), S.11
29) Der jungdeutsche, Nr.274 v.23.11.1929
30) Die Hitler=Partei und ihr Programm.(Der Staatsbürger.Volksnationale Schriftenreihe, Heft 28), S.1f.
31) Ebd., S.2ff.
32) Ebd., S.6f.
33) Ebd., S.15
34) Ebd., S.15f.
35) Der Jungdeutsche, Nr.236 v.7.10.1928

36) Ebd., Nr.185 v.10.8.1929

37) Ebd., Nr.155 v.6.7.1930

38) Ebd. u. Nr.33 v.8.2.1929. u. Nr.212 v.11.9.1930

39) Ebd., Nr.155 v.6.7.1930

40) A.Mahraun, Die Staatspartei, Berlin 1930, S.12f.

41) 更にマーラウンは「今日の西洋世界に存在する三つの行動主義的システム」について論じている。三つとは、ボリシェヴィズムのシステム、ファシズムのそれ、そして青年ドイツのそれである。

42) Der Jungdeutsche, Nr.236 v.9.10.1930

43) Eggeling, S.40f.

44) Kessler, (Ⅱ), S.9

45) Abrechnung mit den Nationalsozialisten!

46) Kessler, (Ⅰ), S.154

47) Der Jungdeutsche, Nr.145 v.25.6.1930. u. Nr.146 v.26.6.1930

48) Ebd., Nr.240 v.14.10.1930

49) Ebd., Nr.91 v.19.4.1929

50) Kessler, (Ⅱ), S.12

51) 拙稿「ワイマル期民間国防団体の政治化」『史学研究』160(1983)、53頁以下。

52) 10.10.1930: Koch-Weser an Eduard Scheidemantel.(註2資料内 Dok.Nr.147, S.408f.)

53) Eggeling, S.26f.

54) Kessler, (Ⅱ), S.11